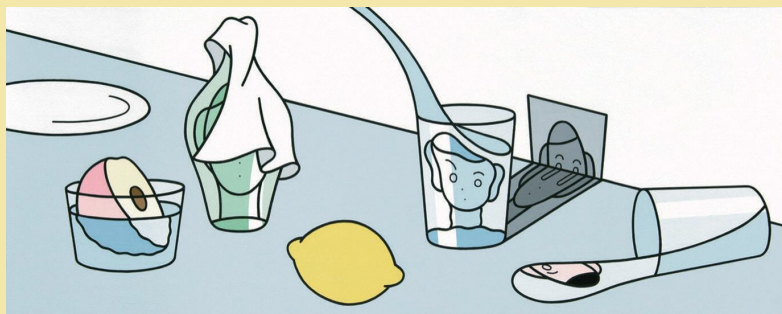


THE GALLERY

もくじ ■企画展 | 「やすらぎの近代絵画—ユニマットコレクション ミレーからワイエスまで—」「ニューアートシーン・イン・いわき unpis ルートs」
「コレクションの輝き」 ■新収蔵作品紹介 | 殿敷侃作《楠木のお好焼風料理法》ドローイングについて 寄稿:小泉晋弥
(茨城県天心記念五浦美術館 館長) ■常設展示室から ■学芸員ノート | 「鈴木新夫について」

企画展 | やすらぎの近代絵画—ユニマットコレクション ミレーからワイエスまで— ニューアートシーン・イン・いわき unpis ルートs / コレクションの輝き



左上 ビエール=オーギュスト・ルノワール
《母子像(アリエヌと息子ピエール)》
1886年、ユニマットグループ蔵

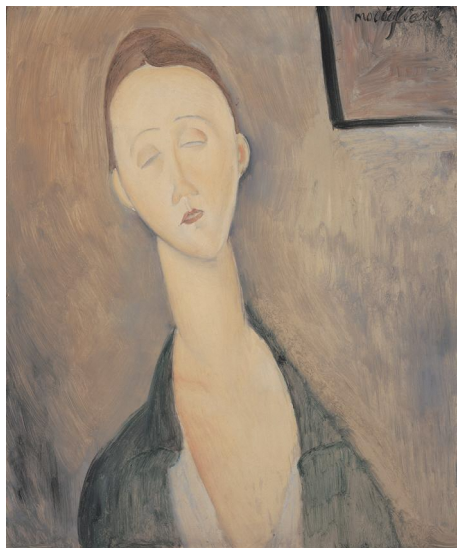
左下 若松光一郎《夕景》1945年、当館蔵

右上 unpis《『DISCOVER』表紙用原画》
2022年、作家蔵

右下 「一戦争の刻印と鎮魂—戦後美術の
原像」会場写真、1988年、いわき市立
美術館

企画展 | やすらぎの近代絵画 ―ユニマットコレクション ミレーからワイエスまで―

9月13日(土)～11月3日(月・祝)



アメデオ・モディリアーニ《ルニア・チェホフスカの肖像》1919年、ユニマットグループ蔵

本展はオフィスコーヒーやインテリア、リゾートなどの事業を幅広く展開しているユニマットグループの創業者・高橋洋二氏が、長年にわたり収集し築き上げた西洋美術の一大コレクションから、選りすぐった精華を紹介する展覧会です。同社の全面的協力を得て開催する本展では、「やすらぎの美」をテーマに、ジャン＝フランソワ・ミレー(1814-1875)などのバルビゾン派から、ピエール＝オーギュスト・ルノワール(1841-1919)やエドガー・ドガ(1834-1917)ら印象派、藤田嗣治(1886-1968)などのエコール・ド・パリ、そしてアメリカの国民的画家アンドリュー・ワイエス(1917-2009)を含めた近代絵画約90点を展観します。のどかな田園や水辺の風景、微笑ましい子どもの姿など、見る者にやすらぎをもたらす魅惑的な作品群による本展は、心豊かな生活を提案する収集家の質の高いコレクションの一端を堪能できる機会となるでしょう。

企画展 | ニューアートシーン・イン・いわき unpis ルートs 9月13日(土)～11月3日(月・祝)

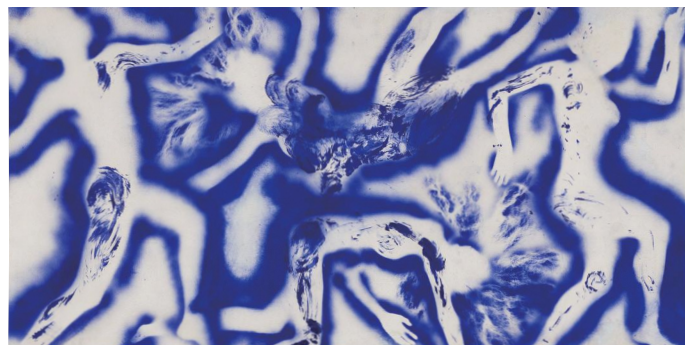
いわきと近隣地域にゆかりのある現代作家を紹介する「ニューアートシーン・イン・いわき」。51回目となる今回は、いわき市出身のイラストレーター・unpis(ウンピス)を取り上げます。unpisは、武蔵野美術大学基礎デザイン学科卒業後、2018年頃からイラストレーターとして活動を始めます。ウェブや書籍の挿絵から、IKEA、PARCOといった企業の広告ビジュアルまで、数多くのクライアントワークに加え、個展・グループ展で作品の発表を続けています。地元いわきでもいわきアリオス発行のアリオスペーパーの表紙や、当館発行のアートマップ「てくてく彫刻マップ」のイラストを担当しています。

どこにでもあるモチーフを独自の視点からとらえ、シンプルな線と鮮やかな色彩によって表現するunpis。本展では、今まで辿ってきた道(route)／作家自身の根源(root)／ルーツ(roots)であるいわき市での展示という意味を込めた「ルートs」と題して、新作ほか、これまでの幅広い活動を概観します。



いわき市立美術館では、いわきゆかりの美術と1945年以降の現代美術を収集の大きな柱としています。今回のコレクションを用いた企画では、現代美術が親しみやすくなるように、子どもの頃に近所の風景や友達を描いたことがある誰もが、馴染みやすい「風景」と「人間」をキーワードに、展示構成を大きく二つに分け、分かりやすいような写実的な絵画から、少し謎めいた表現まで多様な作品を展示します。

会場では、来場者が展示作品の中からイチオシの1点を選ぶことで能動的な鑑賞につながるように、投票と掲示の場を設けます。こうしたアプローチにより、今まで現代美術への苦手意識を持っていた方でも、展覧会を楽しめるのではないかと考えています。クラインやウォーホルなど当館を代表する作品をはじめ、戦後のいわきの美術界を代表する若松光一



イヴ・クライン《人体測定ANT66》1960年

郎の作品など、各作家の個性輝く約80点の作品を鑑賞することができます。

とのしきただし

殿敷侃作《楠木のお好焼風料理法》ドローイングについて

「戦後美術の原像」展1988年

「一戦争の刻印と鎮魂―戦後美術の原像」展(以下「原像展」)は、戦後美術の収集を方針に掲げるいわき市立美術館として、「戦後」とは何か? 「美術」とは何か? を再確認する展覧会として企画した。特に、当時タブーとされた「戦争画」を、戦前と戦後をつなぐ重要なファクターとして扱おうとしていた。東京国立近代美術館に永久貸与されている作戦記録画を借りられないか、と田中淳氏(現大川美術館長)に相談すると、答えの一言が「止めなよ」だった。大学の1年後輩という間柄ならではの冗談だが、半分は本気だったと思う。そのくらい、戦時中の画家による戦争協力はデリケートな問題だったのだ。結局、東京国立近代美術館からは無難な作品を借りて、凄惨極まる戦闘シーンは盛岡橋本美術館から借用することになった。それでも船の科学館から借用した藤田嗣治の作品について、掲載許可をお願いしたところ、君代夫人から直接お断りの電話をもらった。

「美術」とは何か? という問いについては、広島市原爆資料館からお借りした数十枚の「市民が描いた原爆の絵」が突きつけることになった。これは、会期中に来館した若桑みどり先

生が息を潜めてご覧になり、後日、美術にはどうしても伝えなければならないメッセージがあることを考え直すきっかけになった、と記した書簡を頂いた。

当時の筆者は、現代美術界にはほぼ知己がなく、ふさわしい作家の推薦を学芸会議で依頼した。それに応えて南畠宏氏が推薦してくれたのが、鯉江良二氏、西雅秋氏そして殿敷侃氏だった。

山口県立美術館で香月泰男のシベリアシリーズの出品交渉をして、長門市の殿敷氏の仕事場にお邪魔した。すぐに出品の了承を得られたのだが、そのまま香月泰男の話題になった。東京で華々しい活躍をする香月が山口の美術界では孤独だったということ。山口のバーで、一人でウィスキーを飲む姿が印象的だったこと。そういう酒が命を縮めたのではないかとも語っていた。近くの三隅町に香月のアトリエが残っているから尋ねて見たら、と促されたが、アポイントもなかった。タクシーの帰り道に小川沿いにあったアトリエの前に寄ってもらい、対岸の道路から眺めて帰った。婦美子夫人からの掲載許可は、その後書簡でいただいた。

しばらくして殿敷氏から送られてきたのが、ドローイング

《楠木のお好焼風料理法》である。インスタレーションのプランドローイングとして、様々な指示がボールペンで示されていて、作業のための助手が二人必要だという要請もあった。そこで吉田重信氏に依頼して引き受けてもらい、もう一人の当てがなかったため筆者が自分で手伝うことにした。7月28日、29日を公開制作としたようなのだが、自分では全く覚えていない。

《楠木のお好焼風料理法》から《バリケードいわき》へ

来館した殿敷氏は、美術館前の広場を歩き回りながら、すぐにプランの変更を申し出た。楠に廃材やタイヤを差し込むだけでは、物足りないという判断だったのだろう。急きょ、ヘンリー・ムーアと楠の間にバリケードを作るというプランになったが、それには持ち込んだ廃材が足りない。そこで廃タイヤを何本か現地調達できないか、という殿敷氏に対して、吉田氏が廃車ではどうかという提案をしたのだ。吉田モータースから軽トラックとセダンが到着するのを待つ間、筆者は、今回吉田氏を助手にして本当によかったと彼の経歴を殿敷氏に話した。折から雨も降り出す中、一日目はベースとしてコンパネを敷いて車を2台横倒し、倒れないよう固定して終わった。

二日目は、コンテナの廃材を廃車2台と組み合わせる制作なのだが、展覧会の全体設営が大詰めで、殿敷氏の制作は、吉田氏と当時勤めて四ヶ月の新人学芸員だった杉浦友治前館長をお願いして、筆者は展示室と玄関前広場を行き来することになった。

殿敷氏は手慣れた様子で、漂着ゴミを焼き固めた団子、柱の廃材、タイヤをバランスよく積み重ねていく。助手たちは、指示に従ってコンテナから必要な材料を手渡すだけだった。最

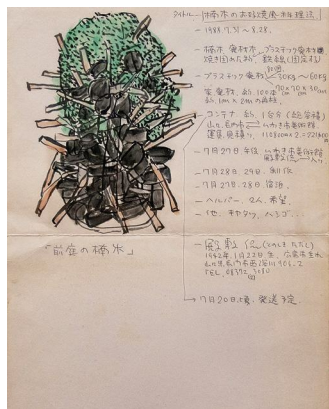
後に崩れないように番線を張り巡らせて、インスタレーションは組み上がった。お茶でもとお誘いしたのだが、その暇もなく殿敷氏は東京の秋山画廊へと慌ただしく去った。年譜で確認すると、彼は秋山画廊(7月25日～8月6日)、広島 MICHIKO ART GALLERY (7月28日～8月9日)、それにこの「原像展」(7月30日～8月28日)と、広島、長崎の原爆忌に並行して3つの展示を行っていたのだ。

バリケードの存在感は抜群で、当初の案の通り、楠に廃材がまわりつくインスタレーションだったなら、楠の周囲にしか響かなかっただろう。ヘンリー・ムーアの彫刻と楠と美術館の建物の中間地点に異様な迫力の異物が挿入されることで、日常生活のただ中に突然廃虚を出現させる、原爆の暴力的な存在を実感させた。歴史的なイメージを提出するのではなく、美術作品として、今を生きる私たちにその感情を沸き立たせた。岡倉天心が『茶の本』の最後の章で述べていた to make of it a living influence(その物質から生きた力を生み出す)という芸術鑑賞=制作の本質的な力を確認させてくれたのだ。

でき上がったインスタレーションを見ながら、吉田氏が「殿敷さんのやり方は、自分の考え方と同じだった。俺でもこうやと思う」とつぶやいた。筆者は、現代美術作家・吉田重信が誕生したのはこのときだっただろうと確信している。

水戸芸術館の開館準備をしていた渡部誠一氏が「原像展」に刺激を受け、1991年の「水戸アニュアル;美術とメッセージ展」で殿敷氏に《対峙する墓標》の制作を依頼した。その展示室にはぎっしりと自動車が並んでいた。「原像展」での経験が、殿敷さんの作品制作に自動車を新たな素材として加えたのだと感じた。

それから一年後の1992年2月、殿敷さんが肝臓ガンで亡くなった。50歳の若さだった。その訃報は郡山市立美術館の学芸員として聞いた。そして1996年に茨城大学教育学部へと転職するのだが、その理由は「原像展」を評価していただいた森田義之氏(現愛知県立芸術大学名誉教授)のお誘いだった。いわきでのこの展覧会が、筆者に様々な道を開く契機となった。(小泉晋弥)



殿敷侃《楠木のお好焼風料理法》ドローイング、1988年



《バリケードいわき》展示風景、1988年

筆者プロフィール

1953年福島県生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修了。いわき市立美術館学芸員、郡山市立美術館学芸員を経て、2019年まで茨城大学教育学部教授。2022年より茨城県天心記念五浦美術館館長。茨城大学名誉教授。著書に『新訂増補 岡倉天心と五浦』(中央公論美術出版、2021年)など。

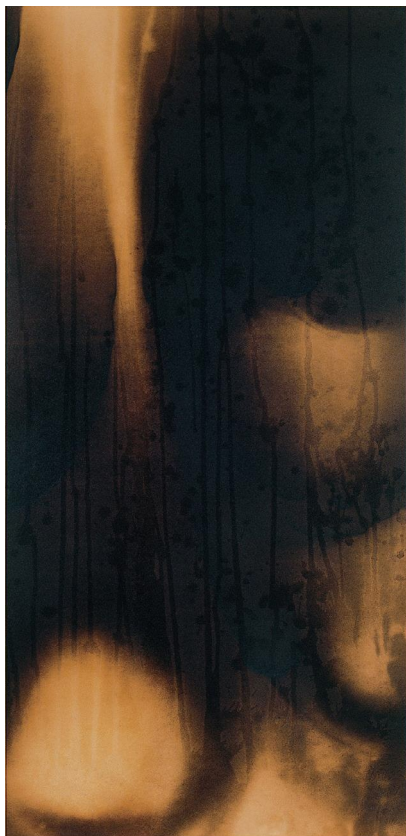
常設展示室から

常設展後期Ⅰでは、「多様化する現代美術」と「色と形・素材とのかかわり」という2つのテーマを軸に、国内外の革新的な芸術表現を紹介します。また、昨年惜しくもご逝去された画家で当館名誉館長の田口安男(1930-2024)の作品展示を行います。

「多様化する現代美術」では、戦後の美術において伝統的な絵画や彫刻から解放され、新しい表現の形を追求した作家たちに焦点を当てます。フランスのイヴ・クラインは、ガスバーナーの炎で画面を焦がし水で消火する技法を用いて《火の絵画》(1961)を制作しました。火を素材・制作手段として用いた最初の作家であると考えられており、同世代のみならず後世の作家たちにも大きな影響を与えました。また、イタリアのルーチョ・フォンタナは、カンヴァスを切るという大胆な行為で絵画の境界を問い直しています。日本人においても1950年代以降、山口長男、村井正誠が独自の抽象表現を追求し、水玉や網目模様などで画面の表面を覆う作品を展開した草間彌生が前衛芸術家として活躍しました。彼らの試みは、戦後美術における新しい可能性を切り拓きました。

「色と形・素材とのかかわり」では、色・形・素材に焦点を当て、シンプルでありながらその本質的な美しさが引き出されている作品を紹介します。アメリカのフランク・ステラは、正方形のカンヴァスに鮮やかな色でストライプ模様を描いた《ウリッド・スケッチ》(1967)を制作しました。彼の作品は、意味の解釈よりも、色と形を通じた視覚的な直接体験を重視するため、シンプルで明快な形が採用されています。その他、オプティカルアートなど色や形を効果的に用いた作品も紹介します。

そして、小スペースながら、当市出身の故名誉館長 田口安男の特別展示を設けます。画家である田口は、「手」や「焰」、「波」をモチーフに、生動感あふれる独自の世界を画面上で追求しました。また、古典技法である「黄金背景テンペラ」の研究で日本の第一人者でもあり、その技法を広く普及させまし



イヴ・クライン《火の絵画》1961年

た。当市の文化および美術への貢献は非常に大きく、今回は主要な作品を紹介します。

(学芸課長 江尻英貴)

多様化する現代美術

令和7年10月21日(火)～令和8年3月31日(火)

後期Ⅰ 色と形・素材とのかかわり

令和7年10月21日(火)～令和8年1月18日(日)

後期Ⅱ 新しい秩序の創造

令和8年1月20日(火)～3月31日(火)

学芸員ノート | 鈴木新夫について



《機関庫》1947年 油彩・カンヴァス 110×144cm

鈴木新夫(1915-1980)は、いわきの美術界に大きな足跡を残した作家のひとりです。当館では素描を含め160点以上の作品を収蔵しており、1995年には大規模な回顧展を開催しています。鈴木は、戦後いわきの美術を牽引した若松光一郎と旧制磐城中学校の同期で、ともに同校の美術クラブ「X会」に所属したのち、東京美術学校(現・東京藝術大学)に進みました。鈴木は図画師範科、若松が油画科と学科は異なっていたものの、二人は入学の翌年に共同で池袋にアトリエを借りるなど、互いに切磋琢磨する親友でした。その後、鈴木は活動の拠点を豊島区長崎に定め、いわきに戻ることはありませんでしたが、若松を含む作家たちと常磐炭鉱にスケッチ旅行をしたり、いわきで個展やグループ展を開催したり、指導者として

招かれたりするなど、故郷とのつながりは生涯続きました。

鈴木は美術学校卒業の翌年、若松とともに「第2回新制作派協会展(現・新制作協会展)」に出品して初入選を果たし、以後同展を中心に活動を続けます。《機関庫》は第11回展で「新制作派協会賞」を受賞した記念すべき作品です。当時の鈴木は、専ら戦後復興のさなかにある街の風景を描いており、東京田端駅構内にある機関庫を描いたこの作品もそのひとつです。明治期に建てられ大正期に移設されたこの建物は赤レンガ造りで、長谷川利行が描いた《汽罐車庫》(1928年)でも知られるように、画家たちがよく取材した場所でもありました。鈴木作品では、経年か逆光ゆえに黒ずんで見える建物、出入りする複数の汽車と立ち昇る煙、手前から奥へと延びる線路などが、絵の具を塗り重ねた重厚なマチエールと抑えた色調で表現されています。赤い建物と黒々とした蒸気機関車を動的なタッチで描いた長谷川の力強い作品に対し、《機関庫》は復興を支える鉄道の営みを包み込むようなまなざしでとらえた静かな趣の作品です。のちに鈴木は「街を外側からではなく内側から描く」ため、風景画から人物画へと転じて匿名の労働者の姿を描くようになりますが、同時代を生きる市井の人間の現実を具象画で表すその姿勢は終生変わることはありませんでした。

鈴木の生誕110年・没後45年を迎える今年、10月から12月にかけて、豊島区立郷土資料館で回顧展が開催されます。かつて貸しアトリエが建ち並んでいた池袋界隈には芸術家や画学生が多く住み、一帯は「池袋モンパルナス」と呼ばれていました。鈴木が長い歳月を過ごした彼の地での展覧会開催に深い感慨を覚えずにはられません。(館長 竹内啓子)

今後の主な展覧会のご案内

企画展

やすらぎの近代絵画—ユニマットコレクション
ミレーからワイエスまで—

令和7年9月13日(土)～11月3日(月・祝)

ニューアートシーン・イン・いわき unpis ルートs

令和7年9月13日(土)～11月3日(月・祝)

コレクションの輝き

令和7年11月15日(土)～12月14日(日)

いわき市小・中学生版画展

令和8年1月6日(火)～1月25日(日)

第55回いわき市民美術展覧会

〈書の部〉令和8年2月6日(金)～2月15日(日)

〈絵画・彫塑の部〉令和8年2月20日(金)～3月1日(日)

〈陶芸の部、写真の部〉令和8年3月6日(金)～3月15日(日)

常設展後期

多様化する現代美術

令和7年10月21日(火)～令和8年3月31日(火)

後期Ⅰ 色と形・素材とのかかわり

令和7年10月21日(火)～令和8年1月18日(日)

後期Ⅱ 新しい秩序の創造

令和8年1月20日(火)～3月31日(火)